

# 第 15 回月性追慕記念行事

日時：平成 27 年 6 月 14 日（日） 9：00～15：30

場所：1 部 式典（法要）及び吟詠・剣詩舞道等披露

妙円寺（柳井市遠崎 729 番地）

2 部 記念講演会 アクティブやない

主催：公益財団法人 僧月性顕彰会



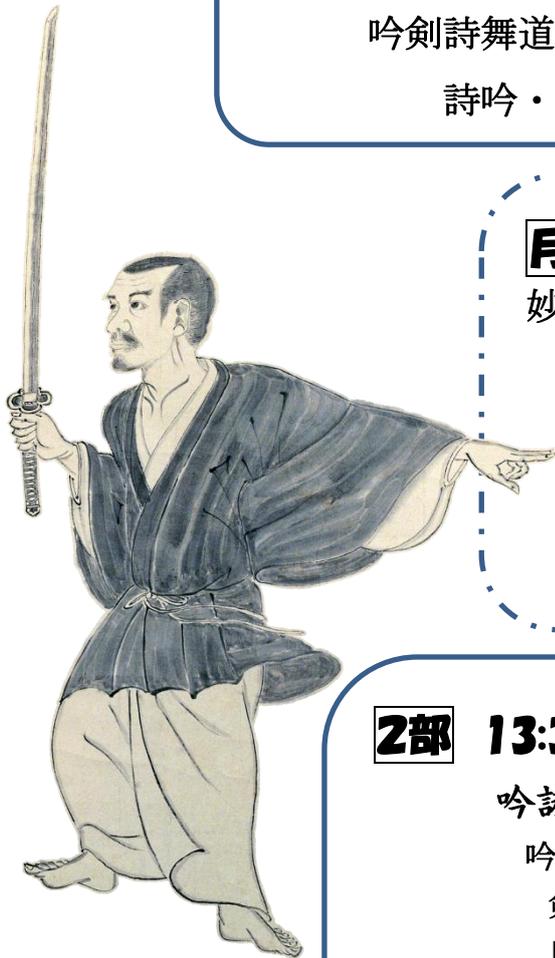
内容：

## 1部 9:00～12:00 妙円寺

式典（法要） 9:00～ 9:50

吟剣詩舞道等披露 10:00～12:00

詩吟・歌謡吟詠・剣舞



## 月性剣舞保存会による販売コーナー

妙円寺（遠崎） 9:00～15:00

月性うどん・いなり・赤飯

冷やしぜんざい・甘酒

どらやき・菓子パン

その他、地元の野菜・苗など

たくさんのご来場お待ちしております！



## 2部 13:30～15:30 アクティブやない（開場 13:00）

吟詠・剣詩舞道等披露及び開会 13:30～13:45

吟題「将に東遊せんとして壁に題す」

剣舞：月性剣舞保存会 会長 西原光治

吟詠：嘉風流吟剣詩舞道 宗家 田邑嘉風

記念講演会 13:45～15:30

演題「月性・松陰・玄瑞・あれこれ」

講師 萩博物館 特別学芸員 一坂太郎先生

問い合わせ：公益財団法人 僧月性顕彰会事務局 TEL0820-45-2211

文化14（西暦1817）年、遠崎の妙円寺に生まれ、幼い頃の名前を「知円」また「煙溪」ともいいましたが、のちに「月性」と改め、「清狂」と号しています。母の尾上は岩国のお寺に嫁がれましたが不縁となり、月性は妙円寺で生まれ育ちました。幼い頃から人一倍元気で腕白だった月性を母は愛情に流されることなく、時に父のように厳しく育てました。また、詩文に優れた叔父の龍護や学僧として知られた祖父の謙讓らが父にも優る人となり、その環境の中で月性は成長していきます。

天保2（1831）年、月性15歳のとき、福岡県豊前市の恒遠醒窓の蔵春園に入塾し、5年間詩文の研究に取り組み、月性の詩人としての基礎がここで培われ、天保7年の秋、佐賀市善定寺不及の精居寮で仏典を学び、長崎でオランダ船を見て世界の状況を肌で感じ、のちに月性が海防僧として活躍するきっかけになります。

天保14（1843）年、27歳を迎えた月性は、さらに学識を高めるため京阪地方へ向かいます。この時出発に際し詠んだ「男兒志を立てて郷関を出づ」で始まる詩は有名で、今も愛唱されています。嘉永元（1848）年頃には、清狂草堂（時習館）を開塾し、多くの門人が学びました。その中には、赤禰武人や世良修蔵、大洲鉄然らがいます。中でも久坂玄瑞は月性を見ると亡き兄、玄機を思い出すというほど、兄のように慕う関係でした。また、赤禰や久坂はのちに松下村塾で学ぶこととなりますが、そこに送り出したのは月性でした。

嘉永5（1852）年、月性36歳で妙円寺第10世住職となり、叔父周邦の娘、梅野と結婚し、4年後には長女、簾子が誕生します。

ペリーの黒船が来航した嘉永6年頃から、月性は最初の建白書となる海防論を述べた『内海杞憂』や政治改革に関する意見を述べた『藩政改革意見封事』を記します。以前から月性の名を耳にしていた吉田松陰は、月性の記した建白書を見て、討幕論の誤りを指摘した書簡を出したことから、意見を交わし親しくなっていきます。

安政3（1856）年7月、西本願寺門主より上洛の召命で、月性は上方を目指し遠崎を発ちます。10月に『護法意見封事』を本願寺に提出し、これが、のちに『仏法護国論（護国論）』という冊子となって全国のお寺に頒布されていきます。

月性の講演は、多くの人々の心を動かす魅力があり、高杉晋作も影響されたといわれ、安政5（1858）年には、松陰も松下村塾生らに月性の講演を聴きに行かせたほどでした。そんな最も活躍していた時に、月性は法談に向かう船の中で発病し、妙円寺にて亡くなります。享年42歳。松陰は月性の死を惜しみ、月性の詩稿を世に広めようと試みますが、安政の大獄で処罰されてしまいます。松陰は月性を「最も卓犖（才知が優れている）を称する者」として称賛し、また「月性の『護国論』や詩稿を同志に示してほしい」という遺書を残しました。その遺志は引き継がれ、のちに松下村塾から『清狂詩鈔』として世に出ることとなりました。月性の遺志は今もなお多くの人びとに受け継がれ、詩も多くの人に愛唱されています。